

日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

やまぎししょうじ
山岸章二 (1928-1979) は、1949年に毎日新聞社に入り、写真部、調査部を経て、同期入社以来の知友である佐伯嘉昭(本名: 恪五郎・山岸の後に『カメラ毎日』編集長就任)の招きで、1958年8月に『カメラ毎日』編集部へ加わりました。

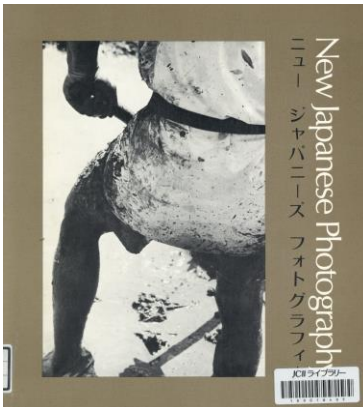
1963年ごろから同誌のグラビア(口絵)構成に係わるようになり、篠山紀信、横須賀功光、大倉舜二など広告・ファッション分野の写真家を積極的に起用しました。大胆な企画の代表は、1965年4月号に掲載された立木義浩「舌出し天使」です。本作品は56ページにわたる「綴じ込み付録」の写真集で、編集会議を通さずに極秘進行させるなど自身の進退を賭したものでした。さらに1966年1月号では、高梨豊「東京人」を36ページにわたり掲載するなど、写真作品と新人発掘に対する鋭い才覚で独自の編集手腕を発揮しました。



『カメラ毎日』1965年4月号

1970年代初頭からは、コンテストとも特写口絵とも違う、プロアマ問わずに参加できる自由な欄「ALBUM」を創設して新しい写真表現の可能性を探りました。1972年には副編集長に就任しました。翌年からは東松照明「太陽の鉛筆」の連載を主導し、本連載は1975年に別冊として刊行されました。1976年4月号からは編集長に就任し、1978年7月号まで携わったのち毎日新聞社を退職しました。

『カメラ毎日』編集の一方で、1971年には『映像の現代』(中央公論社)全10巻のプロデュースに携わり、第8巻の石元泰博『都市』では解説を担当しています。また、1969年にヨーロッパのプロ写真家団体「ユーロフォト」が開催したセミナーに参加したことで、海外の写真家と作品に対しても目を向けはじめました。1971年に渡米して、MoMA(ニューヨーク近代美術館)の写真部長ジョン・シャーカフスキーと交友を得たことにより、ダイアン・アーバス、J・H・ラルディエグ、リチャード・アベドン、ピーター・ビアードらを日本へ紹介しました。1974年には、MoMAの展示『NEW JAPANESE PHOTOGRAPHY』にディレクターとして携わるなど、海外との写真交流に尽力しました。



『ニュー ジャパニーズ
フォトグラフィー』展 図録

毎日新聞社退職後は、写真集・作品展プロデュースを手掛けるとともに、1979年にはニューヨークのICP(国際写真センター)で開催された『JAPAN: A SELF-PORTRAIT』展に携わりました。また『アサヒカメラ』1979年1月号から時評「ニューフランクネス」を寄稿していましたが、同年9月号の連載が遺稿となりました。

『カメラ毎日』編集部員として山岸の下で働き、後に同誌編集長をつとめた西井一夫は、『写真編集者 山岸章二へのオマージュ』(窓社・2002年)で、「山岸というエディターは単なる編集者ではなく、一種プロモーターでもあり、キュレーターでもあり、印刷ディレクターでもあった」と評しています。